哲學研究　第二百二十九號　第二十卷第四册

知的直觀と辨證法

——シェリングの一考察——

赤松元通

一

眞の知識は單なる主觀、單なる客觀に基づくのではなく、兩者の絶對的同一に基づかなければならぬ。然らば此の主觀と客觀との絶對的同一とは如何なることを意味するのであるか。

主觀とは此の場合、知るもの、客觀とは知られるものである。普通には知識とは知るものから獨立に存在せる知られるものを、知るものが寫すと考へてゐる。素朴實在論の模寫主義の考方がこれである。此の考は主觀と客觀との絶對的對立より出

發する。然し乍ら此の場合にも主觀の表象によつて對象を寫す以上、主觀と客觀との合致、もしくは合一が何らかの意味で考へられなければならないであらう、卽ち對立の同一がなければならぬであらう。主客の何らかの合一がなければ知ると云ふことも不可能となるであらう。單に知識の成立といふ點のみならず、それの明證の點より見ても兩者の合一といふ事は、一見客觀のみによつて立つてゐる如き此の立場に於いても、最後の假定でなければならぬ。何となれば此の場合客觀は主觀から全く獨立に存在するものとして假定せられてゐる。そしてかゝる客觀に對して主觀が、或は主觀の表象が合致するのである。合一なる關係は此の場合、假定せられたる獨立的存在に基づくと云ふことが出來る。然しかゝる存在そのものが決して絕對不可疑のものではない。むしろこれこそ最初に疑はれるべき存在であるが故に、かゝるものに基づくところの此の場合の主客の合一そのものも決して絕對不可疑のものとは云ふことが出來ない。要言すれば素朴實在論の合一觀は絕對的客觀が先きで合一はむしろこれに基づく。卽ち此の場合の合一は絕對的客觀にもとづく所の云はば客觀的合一、或は超越的合一である。而して嚴密に云ふならば、此の場合、主觀そのものも實は客觀であつて、主—客の關係といふよりも客—客の關係であり、

眞の主觀は此れらから消えて背後にかくされてしまふのである。卽ち眞の主客の關係は此の場合なほ成立しないと云はねばならぬ。

此れに全く正反對の立場をとるのが構成主義の考方であらう。此れによれば知識は主觀より獨立な客觀の模寫ではなくして、主觀自身の構成である。知ると云ふことは寫すことではなく構成することである。知るものは構成するものであり、知られるものは構成せられるものである。從つて此の場合には構成せられたものの外に客觀はなく、又主觀は自らの構成したもの以外の客觀を知り得ない。換言すれば前の場合と反對に獨立なる客觀は認められず、客觀は云はば主觀の中に消えて、もしくは包まれてしまつてゐる。

然し知識が成立する以上やはり主觀客觀の合一がなければならぬ。唯だ此の場合は兩者の關係は模寫主義の如き超越的な關係でなく、內在的な關係と云ふことが出來る。何となれば知る主觀自身が自らの中に自らに對して客觀を構成するが故である。客觀は客觀であるが、實は主觀の構成であり、從つて主觀的であり、單に內在的な客觀である。知識が主觀の客觀構成であると云ふ意味に於いて此の場合にも主客の合一は考へられる。卽ち此の立場に於いても知識は對立の合一に基づく。

然し此の場合の合一は單に內在的な合一にすぎない。云はば凡てが主觀の中に包まれて居り、合一も主觀內に於ける合一となる。

一體知識の基礎として主客の合一が要求されるのは、要するにそれの客觀性を基礎づけんが爲めに外ならない。然るに此の場合の合一は全く主觀的な意味以外に出づることは出來ない。合一の眞の意味は互に獨立し乍らも、從つて各々が眞の全體であり乍らも而かも一つであると云ふ所になければならぬが、此の場合の合一は決してかゝる意味を持ち得ない。主觀によつて單に構成され、產出されたものは眞に客觀として、獨立的にそれ(主觀)に對立することは出來ない、と云はねばならぬ。從つてかゝる合一は眞に知識を基礎づけるには不充分で、徹底的に考へるならば知識の客觀性を否定せざるを得ないことになるであらう。

此の事は構成主觀を超個人的な主觀と考へることによつても直ちに解決することの出來ない難點である。何となれば問題はかゝる超個人的主觀そのものに對する客觀の對立にも關係するが故である。成程超個人的主觀の構成は個人的主觀の構成に對しては客觀性を持つと云ひ得るであらう。然し超個人的主觀もやはり主觀である以上、此の主觀の構成そのものに規準を與へる所のもの、かゝる主觀が合致

すべき客觀(必ずしも實在といふ意味ではない)が考へられる必要はないであらうか。

構成主義に於いては普通かゝる主觀の構成の眞理性、卽ち客觀性は疑の外におかれてゐる、否むしろ此の立場に於いては客觀性といふことはかゝる先驗的主觀の構成といふことに外ならない。客觀は主觀の構成であり、主觀は自己の構成せる所の客觀に合致する所に、此の場合の主客の合一がある。云はば主觀の自己同一が此の場合の同一を特徵付けると云ふべきである。前の場合は超越的なる客觀が疑はれたが、今の場合はかゝる意味で疑はれるものはないが、然しその代りに嚴密なる知識の客觀性が否定されねばならない樣に思はれる。

カントは物自體なる概念を殘した點に於いて構成主義の立場から云へば不徹底と云はれるかも知れないが、然し眞の問題はむしろ此の奧に隱されてゐるものの樣に思はれる。カントに於いては思惟の形式卽ち範疇が直觀の多樣を綜合することによつて對象、卽ち客觀が構成されるのである。主觀は思惟及び直觀の形式であり、客觀はそれによつて構成された對象である。然し此の對象は全然主觀のみの構成ではなく、その根柢に物自體があるのである。主觀は此の場合形式にすぎない。直觀を含むとしても、尙形式である。その內容はも早や主觀卽ち自我から與へられず、

物自體から與へられねばならぬ。此の意味に於いてカントに於いては主客の合一關係は二重に考へられる。一つは所謂構成關係の合一、卽ち構成する主觀と構成されたる客觀との合一で、他は自我としての主觀と物自體としての客觀の合一である。尤もカントに於ける合一關係は普通に單に思惟と直觀のそれとして考へられる。知識は此の合一の上に基づくのである。カント認識論の根本問題は此の合一が如何にして可能なるかを明かにせんとすることにあつた事も周知のことである。然し此の場合客觀と考へられる所の直觀は純粹なる客觀ではなくして、それ自身又綜合をなす所の主觀としての直觀形式にすぎない。卽ち純粹なる主觀客觀の合一ではなくして、やはり主觀の自己同一と云はねばならぬ。演繹論は對象の客觀性を保證せんが爲めに直觀も思惟の形式のもとに立つてゐなければならぬことを明かにして兩者の同一を主張したが、此の同一は單に形式上の同一にして、直觀の內容にまで關するのではない。此の內容に關するのがカントでは物自體に對する同一と考へることが出來る。

此の物自體に對する同一もしくは合一は模寫主義的合一と類似はしてゐるが、全然同じではない。何となれば模寫主義に於いては對象(客觀)はそれ自身に獨立、完結

せる存在であり、從つてそれはそれ自身の中に客觀的統一を有するものとして考へられなければならないが、物自體は決してかゝるものではない。それ自身に客觀的統一を有つものではなく、唯だ對象の實質的な內容の根柢となるものにすぎない、感覺的素材の根源として考へられるのみである。從つて此れは勿論本來の意味で存在といふことの出來ないもの、云はば無でなければならぬ。構成されたる對象としての有への合一と、かゝる意味での無への合一との錯綜がカントの合一の特徵をなしてゐるとも云ふことが出來るであらう。(カントの物自體については感覺の根源としてのみならず、限界概念或は理念などとしても解釋せられるであらう。今は然し此の問題に深く立入らない。唯だ然し此れらの場合に於いても物自體への合一が無への合一として見られうることは依然として變らない。)

フィヒテに於いてはカントに於ける此の不徹底は除かれて、さきに述べた如き構成主義の純化に進んだことが認められる。自我に絕對的に對立する物自體なる概念は放棄せられ、それに代ふるに絕對的自我の根源的作用としての生產的構想力の無意識的所產なる非我がおかれた。非我は自我の無意識的定立として、自我に對立すると考へられるが、然しそれは自我の定立として自我に依存する。換言すればそ

の對立はあくまでも絶對的自我としての主觀の中に於ける對立と考へられる。從つて彼に於いても主觀客觀の合一は決して絶對的對立の合一と云ふのではなく、內在的合一、主觀的合一と云はねばならぬであらう。自我と非我との合一は絶對的自我としての主觀の媒介に基づくと考へられる。

シェリング及びヘーゲルはかゝる主觀的な主客の同一に對して客觀的な根柢を求めんとしたと云ふことが出來る。シェリングはフィヒテに於ける非我、從つて自然を自我より獨立なるものとし、兩者を相互に對立するものとして考へ、從つてその同一を自我のでもなく、自然のでもなく、むしろ兩者を超えて、それを包むところの絶對的同一として考へやうとした。此の點に於いてはヘーゲルも同樣である。

二

眞の知識はかつてカントが云つた樣に、確實にして而かも新しき內容を獲得するところのものでなければならない。從つて確實性はあるが單なる分析的判斷の如きもの、內容は擴張されてはゐても確實なる基礎を有しないものは眞の知識としての資格はないと云はねばならぬ。かくてカントは眞の知識の形式的特徵として先

天綜合判斷を擧げたのである。

知識は勿論知るものと知られるものとの結び付きに於いて成立つ。知られるものなくして、或は知るものなくして知識はあり得ない。一見、知るもの無き直觀的狀態や、知られるものなき自己意識の如きものと雖も、一方は知られるものの中に知るものが、他方は知るものの中に知られるものが沒入して意識せられない狀態におかれてゐるにすぎないのであつて、決してそれらが存しないのではない。

眞の知識は知るものと知られるもの、卽ち主觀と客觀との眞の同一に基づかねばならない。眞の同一とは主觀は主觀として客觀から獨立、客觀は客觀として主觀から獨立にして、兩者の間には全く連續的な推移もなく、一定の所謂媒介もなく、從つて絕對的なる對立であり乍ら、而かも同一として考へられるものでなければならぬ。かゝる絕對的同一がなければ眞の知識は決して可能ではない。よく知識は主觀客觀の對立に基づく、知識は對立の立場である、と云はれるが、然し對立からだけでは知識は生じない。對立は勿論缺くべからざる知識の契機には相違ないが、此れのみでは知識は可能ではない。又知識は單なる對立の立場であるのでもない。むしろ今述べた如き對立の同一こそ眞の知識の根基と考へられるのである。

然らばかゝる根基は如何にして可能であらうか。先づ合一或は同一と云ふことは如何なることであるか。

同一には二つの對立せる對象間の關係を表はす場合と一つのものの規定を表はす場合、卽ち自己同一とが考へられる。前者を綜合的と云ふならば後者は分析的と云はれるかも知れない。前者の同一が成立せんが爲めには勿論後者がなければならない。何となれば、例へばA＝Bなる同一關係が成立せんが爲めには A＝A, B＝Bなる二つのものの自己同一が假定されねばならぬからである。從つて二つの對象間の同一よりも一つの對象の自己同一の方が更に根源的なものと考へることが出來る。

自己同一は普通に全く分析的な、單純な同一であると考へられる。然し嚴密に云へば此の自己同一も決して單に分析的なものではない。A＝Aに於いても初めのAと後のAとは決して同じものではない。全く同じならば單なる同語反覆にすぎぬ。知識の眞の形式として實在性を持たんが爲めにはA, A,は異なるが、然し同一である、といふ意味、換言すれば對立の同一といふ意味を有せねばならぬ。初めのAは實在的なるもの、特殊的なるもの、主語的なるもの das Reale, Besondere, としてのA、後

のAは觀念的なるもの、一般的なるもの、述語的なるもの das Ideale, Allgemeine, としてのAでなければならぬ。Aの自己同一は唯だ考へられたる同一、靜的な單純なものではなくして、事象そのものが自己を同一として維持する働らきと見られる、卽ちAの自己同一はAの自己限定を意味せねばならぬ。或る對象が自己自身を維持すると云ふことは、それが自己自身を限定することでなければならぬ。それが自己限定と考へられるならば限定せられる自己と限定する自己とは當然異ならねばならぬ、而かも自己限定である限り兩者は同一でなければならぬ。卽ち物の自己同一に於いても單なる靜的分析的同一ではなく、對立、卽ち觀念的(イデアール)としての限定する自己と實在的(レアール)としての限定せられる自己との同一と云ふ意味がやはり表はされてゐなければならぬ。然し此の限定といふ事は限定せられるものが限定するものから單に發出すると云ふ意味、從つて前者は後者に對して全く獨立性を有せず、その中に包まれ切つてしまふと云ふ意味に考へられてはならぬ。かくては特殊的個別的なるものの獨立性、自發性は全然否定されねばならぬ。然し特殊は特殊として一般に對して、又レアールなものはレアールなものとしてイデアールなものに對して獨立性を有せねばならぬ。此の事は一般が特殊に對して、又イデアールなものがレアールなも

のに對してそうであると同樣である。卽ち一方は包んで而かも包まず、他方は包まれて而かも包まれずといふ樣な關係が考へられねばならぬ。然し此の爲めには始めのAとあとのA、卽ちレアールなAとイデアールなAとは各々それだけで獨立で、全體としてあり得て、而かも他なくしてはありえない所のもの、換言すれば獨立的に對立し乍ら而かも同一なるものとして、絕對同一的根基の上に立つてゐる所のものとして考へられなければならぬ。（後にのべる分立の同一）

感性的直觀の對象となるが如き自然、物、或は所謂事實等も自己同一と考へられる限りやはりかゝる意味に於ける同一を有せねばならぬ。尤も廣く自己同一と云へばかゝる實在的なる對象についてのみならず、單に觀念的なる對象、悟性的反省的認識の對象となる意味の世界の自己同一も考へられるであらう。そしてかゝる同一も自己同一である限り勿論、以上のべた如き構造を有することは云ふまでもないが、しかし今はかゝる點については深く立入らない。扨てかゝる對象的な自己同一は、然し尙ほ本來の意味の同一、主客の絕對的同一と云ふことは出來ない。此處には眞の主觀はまだ無い、まだ現はされてゐない。かゝる同一の底に深く入り込んで眞の主觀を求める時、そこにはシェリングの自然哲學に於けるが如き根源的自然の同一

が把握されるであらう。

以上は同一を對象の同一と考へて來たのであるが、此れに對して作用の同一を考へることが出來るであらう。勿論此の作用は單なる心理學的な、從つて經驗的なものを指すのではない。かゝるものは作用と呼ばれても、既に客觀化され、對象化されたもので、その限りそれは前の對象の同一と本質に於いて異ならないであらう。此處では決して客觀とならざる自我の働きを作用と考へ、かゝるものの同一を考へるのである。此の同一は勿論、對象とならないもの(自我)の同一なるが故に同一そのものも對象的なものではない。云はば自我そのものの同一であつて、自我が對象とならないと云ふ意味に於いて此れも亦對象とならない。對象的同一を客觀的同一と呼ふならば此れは主觀的な同一である。此れは絶對に對象とならないものに關するが故に勿論二つのものの間の同一として、比較されたり、考量されたりすることが出來るものではなく、全く自己同一として考へられねばならぬ。此の自己同一はやはり自己が自己を同一に維持すると云ふ自己限定の意味を有せねばならぬが、然し全く存在とならぬ純粹活動としての自己限定と云はねばならぬ。フィヒテの自我の活動の如きはかゝる同一を根柢とすると云ふことが出來るであらう。

以上は物の同一と自我の同一についてであるが、此の外に我々は、客觀的及主觀的同一に對して、絶對的同一とも名づけらるべき同一を考へる。此れは云はば兩同一の止揚として考へることが出來るのであるが、客觀的同一は客觀的對象の自己同一として、主觀的同一は主觀的自我の自己同一として、前者は客觀的有、後者は主觀的有の夫々の自己限定と考へられるのであるが、此れらに對して絶對的同一とは限定するものなき、卽ち如何なる意味に於いても有とならざるものの自己限定として考へられる。絶對に無にして自己を限定するものの同一こそ絶對的同一でなければならぬ。

此の絶對的同一は客觀的同一及び主觀的同一に對立もしくは併立するものではなくして、それらの辨證法的統一でなければならぬ。客觀的同一、主觀的同一と雖も勿論その根基としてかゝる同一を持たなければならぬのである。かゝる絶對的同一を根基として客觀的有が客觀的有として、主觀的有が主觀的有として、有ることが出來るのである。從つて此れ自身はも早や客觀的及び主觀的有の如き意味に於いて有り得ないことは云ふまでもないであらう。

客觀的同一を有として考へるならば主觀的同一は勿論も早や此の意味に於いて

は有とならないものである。自我は物と同じ意味に於いては決して客觀となることは出來ない。從つて無と云はねばならぬ。然し乍ら此の主觀的同一もしくは自我の無は云はば相對的な無である。客觀的同一の有に對しての無である。純粹なる作用或は活動は勿論物と同じ意味に於いては有とはならない。自我に於いて、自我の作用の中に有(物)が現はれると云ふ意味に於いて、それは有(物)が於いてある場所の意味を持ち、その限りに於いて無と云ふことが出來るであらうが、然し物が作用の中にあると云ふことは決して絶對的のものではない。或る意味に於いては反對に作用が物に於いて働くと云ふことが出來る、卽ち物が却つて作用を支へてゐる、作用の於いてある場所として考へられることも出來る。かくなれば作用(自我)が却つて有にして物が無(場所の意味に於いて)と考へられるであらう。主觀的有の無としての相對性はかゝる意味に止まらず、更に自らよりも高き立場(卽ち絶對的同一)に於いて、その一契機として把握され、有としてみられると云ふ意味に於いても考へられるであらう。

以上は知識の根基としての同一を主觀客觀の絶對的同一といふ點より考察したのであるが、同じく同一と云つても單に對象的存在、或は主語的存在の同一のみなら

ず、非對象的なるもの、例へば純粹自我、根源的自然の如きものの同一が考へられることが注意せられたのである。普通に知識の基礎としては此の對象的存在の同一の中より、卽ち一方此れのレアールな同一の形式としての感性的直觀の形式、他方、イデアールな同一の形式としての概念、或は思惟の形式が考へられるが、此れらは云はば、既に限定せられたものの同一にすぎぬ。それに對して限定するものの同一、卽ち作用の同一が求められる所以である。主客の同一と云へば對象的に考へられた客觀と、同じく對象的に考へられた主觀との合致と云ふ意味では勿論ないにしても、尙ほ、單に對象と一つになると云ふ風に全く對象的な方向に考へられ易いのであるが、眞の主客の同一はかゝる考方では充分明かにせられないであらう。非對象的同一の中にも純粹な自我の同一(イデアールな側面)と根源的自然の同一(レアールな側面)とが考へられる。何れも對象的同一でないと云ふ點、換言すれば感性的直觀によつて捕へられないと云ふ點に於いて共通してゐるが、一方は他方の否定であつて、自我に對する否定原理は自然(所產的自然ではなく根源的な所謂第一の自然)であつて、自然に對する否定原理は自我である。自我及び自然の同一が互に對立、否定する以上、或は此れらの非對象的同一が對象的同一と對立、否定に立つ以上更に此れらを包むと

ころの深き同一がなければならぬ。眞の絶對的同一は、かゝる單に自我或は自然、更には對象的、非對象的といふ對立に固定されず、かゝる對立――後に明かにされる言葉を用ふれば、分立――の、卽ちかゝる意味でレアール、イデアールの同一として考へらるべきであらう。

扨て一般に同一の對項(コレラート)として、此れを內容とする働の方面が普通直觀と呼ばれるが故に、同一のかくの如き種々相に對して直觀の、或は知的直觀の種々相が考へられるであらう。同じ主題ではあるが、吾々は此の方面からもう一度此の點を考へて見やうと思ふ。

三

主觀客觀の同一が色々の姿に於いて考へられた如く、此れに對應する所の直觀が色々に考へられることも當然であるが、吾々は最初に先づ感性的直觀と知的直觀との關係を考へて見やう。

感性的直觀と知的直觀とは普通に全く違つた、而かも獨立的なものと考へられてゐる。シェリングも初め(例へば Vom Ich. I, S. 181, System d. T. I. III, S. 369.) 知的直觀

をば、感性的直觀が客觀の直觀なるに對して、決して客觀となり得ないもの、卽ち自我、純粹主觀の直觀として考へた。客觀がある所には感性的直觀があり、又その逆が云ひ得る。客觀のない所、卽ち絕對的自我には感性的直觀はなく、もしあるとすれば唯だ知的直觀があるのみである。感性的直觀は物、客觀、所與との直接なる合一であり、その合一は與へられたるもの、卽ち外から來、從つて又それは偶然的なる意味を持たねばならぬが、知的直觀は自己自身で客觀となるものの知であるが故に、その知の客觀は決してその知より獨立でなく、自己自ら客觀を生產し、生產しつゝ同時に此れを直觀するのである。從つてその合一は自らによつて、卽ち內より自由に與へられ、而かも偶然的でなく必然的でなければならぬ。

かくの如く此の二つの直觀は一方は、純粹なる客觀、物に關するもの、他方は純粹なる主觀、活動そのものに關するものとして一應は區別せられるが、然し此の區別は果たして絕對的のものであらうか。一體主觀を全く離れたる純粹なる客觀、或は客觀を全く離れたる純粹なる主觀なるものは抽象によらずして認めうるであらうか。純粹なる客觀、或は絕對的客觀のみが存し、此れに吾々が直接に關係すると考へられる場合、たとひ、客觀自身が吾々に働きかけてくると考へ樣が、反對に吾々が對象に向

つて行くと考へ樣が、兩者の間に何らかの內的根基が考へられない限り、此の合一自身は單に偶然的といふよりは、むしろ不可能と云はなければならぬのではなからうか。偶然的と云ふ事は尙ほ合一の可能のあることである。感性的直觀の合一が偶然的であると云はれる點より云つても、絕對的客觀、主觀と全然內的關係のない所の純粹客觀の直觀とは考へられないと思ふのであるが、更に一步進めて云へば感性的直觀の合一は決して單に偶然的ではあり得ない。成程その內容は吾々に對して外から與へられて吾々は此れを如何ともし難いと云ふ點より云へば、その合一は偶然的であると云ひうるが、然し一面、それは又吾々の直觀である、吾々が一つの理念に從つて自由にそれらを構成し、統一しうると云ふ點(例へば藝術的直觀にまで高まりうる感性的直觀を見よ)より云へばそれは決して偶然的とのみ云ひ得ないでおらう。尤も感性的直觀としては純粹なる藝術的直觀の如き此の意味の必然性が尙明瞭に現はれてはゐないであらうが、然しその萠芽は認めなければならないであらう。

然らば感性的直觀のかくの如き必然性の根據は何處に求められるであらうか。感性的直觀の本質は上述の如くその合一が一面、偶然性を有しながら他面必然性を有つといふ點、(內容の性質から云へば反對に合一が偶然であるが故に、それは吾々

を超越し、その意味に於いて客觀的、必然的、合一が必然的であるが故に、それは吾々に內的で自由である)にあるが、普通には此の後者、その內面性、自由性は餘り注意せられず、その內容の超越的起原の方面から、その根據を外的に考へるのである。例へば觀念論的方向に於いてさへも物自體の如きものが考へられる所以である。

然し乍ら此の感性的直觀に於いて考へられる所の外的な、レアールな根據は一體何であらうか。意識的內容のみが有とよばれるならばこれは勿論無にすぎないかも知れないが、全然の無でないこと明かであるとすれば、かゝる無は一體何であるか。

私は感性的直觀と知的直觀とを全く別のものとはせず、感性的直觀を絕對的直觀としての知的直觀の抽象的な一契機或は一段階として考へたいと思ふのである。丁度シェリングが「先驗的觀念論の體系」に於いて考へた如く、一つの同一なるものの自覺的發展(時間的の意味ではない)の原始的段階とも云ふべきものである。後に自覺される所のものは今は唯だ暗きレアールな根柢として云はば無として働いてゐるのである。此の暗き否定的根柢の上に、光によつて照された、卽ち自覺された內容が存しうるのである。後に詳しく論ずる樣に具體的な知的直觀に於いては、デアール面のみならずレアール面としての否定的な暗き根柢が存するのである。知的

直觀は純粹主觀の直觀であると云つても決してイデアールな活動のみではない。イデアール、プラス、レアールである。知的直觀の知的直觀たる所以はやはり此のイデアール、レアールの對立的合一の具體的なる直觀にあるのである。感性的直觀も單にレアール面のみでなくやはりイデアール、プラス、レアールである。然し此の直觀はイデアール、レアールの結合を具體的に直觀せず、此れを引き離して、云はゞレアールの根を斷ち切つて、それだけとして直觀する。此處に抽象性がある。主客觀化の働の全體でなしに、客觀化されたる客觀だけを引き離して見る。切り離されゝば此れは獨立なフュールジッヒなものとなり、從つて此の對象との合一は偶然的と見られざるを得ない。かく此の直觀は具體的な合一の全體でなしに單にその一面のみを見るにすぎないもので、從つてその背後には常に此れを包む所の全體卽ちイデアール、レアール或は主客觀があるのである。

勿論此の直觀に於いても主客の同一は實現されてはゐる。然し此の場合の同一は物と我との眞の絕對的同一としてゞはなく、我は此の場合物の背後にかくされ、從つて同一は單に物の自己同一として現はれる。我があるのではなくして物があるのである。物の自己同一が此の場合の同一の內容をなすのである。從つて此の根

柢には我の同一、更には我と物との同一として自覺されるべき根基が尙蔽はれてゐると云はねばならぬ。

要言すれば感性的直觀は自己の眞に具體的な根基をば尙ほ自覺しない、自らを包むところの眞の無を自覺しない。此れが自覺されゝばも早や感性的直觀ではなくなり、知的直觀となる。從つて知的直觀も感性的直觀の內容を全然離れた單なる非感性的直觀ではなく、むしろ感性的內容の奧に深く掘り下げらるべきものであらう。

從つてかく考へるならば感性的直觀に於ける、さきに求められたる根據は、ある意味から云へば感性的直觀の外ではあつても(何となれば感性的直觀の立場では決して到達し得ないそれ自身の暗き根柢であるからである)全然の外ではなく、自ら自覺しないが、自らを在らしめてゐる所の自らの根柢である。此れは唯だ知的直觀として更に具體的な立場に於いて後に自覺される所の自己そのものに外ならない。此の故に、卽ち自らの中に自らが自覺しない根柢を持つと云ふ意味に於いて感性的直觀の合一は外からと考へられ、從つて偶然的と考へられる、然し此の根柢は自己の根柢である、後に自覺される所の根柢であるといふ意味に於いて、それは內面的必然的であると見られるのである。要するに感性的直觀と知的直觀とは全く別物ではな

く、感性的直觀は自己の具體的根基として知的直觀を背後に豫想して居り、後者の前階或は抽象的一面であり、又それの自覺の契機であると云ふことが出來やう。

扨て以上の如き感性的直觀に對して考へられる知的直觀は全然對象とならざるもの卽ち自我の直觀である。フィヒテが考へ、シェリングが最初考へた知的直觀も此れである。自我は自己自身で客觀となるものであつて、物の如く根源的に客觀であるのではない。根源的に客觀であるものは自我ではない。此の意味に於いて自我は物の否定であり、物は自我の否定である。感性的直觀の同一は云はば偶然的と考へねばならなかつたが、知的直觀の同一は必然的と云はねばならぬ。何となれば此處に於いては主觀も客觀も同じ自我であり、自我は自らを自由に客觀としつつ、同時に此れを直觀するが故である。換言すれば自我はその客觀を生產すると同時にそれを直觀するが故である、從つて同一そのものが自我の本質をなすが故である。

此れによつても明かな樣に自我は成程物に對しては純主觀、イデアール面のみの樣に考へられるが決してそうではなく、あくまでもイデアール面とレアール面との同一でなければならぬ。自我の直觀が知的直觀であると云はれる眞の根據は、それが單に非客觀的、非感性的であると云ふ點ではなくして、むしろイデアール、レアール

の或は主觀客觀の絶對的同一の直觀であると云ふ點になければならぬ。單なる主觀のみでは、或は單なるイデアール面のみでは自我もないのみならず、知的直觀もない。

然し乍ら自我の直觀としての此の知的直觀は物の直觀としての感性的直觀に對して、確かにイデアール面が前景に現はれてゐることは否むことは出來ぬ。自我は勿論單なる主觀、イデアール面ではないが、主觀或はイデアール面の自己客觀化として捉へられてゐる。先驗哲學の對象としての自我の自覺の過程はイデアール、レアールの同一としての自我がイデアール面を中心として、此の對立を通じて、その具體的根基を自覺して行く道程に外ならない。此れはたしかに此の知的直觀の一面性であり、抽象性であると云はねばならぬ。主觀が中心になり、根柢になつてゐる。具體的に見れば主觀客觀、イデアール、レアールの同一が常に中心になるべきであるのを此の場合は出發點として先づイデアールな、無限に進む、制限せられずして、自ら制限する所の活動が本來の自我として根柢におかれてゐる。そしてレアールな活動は單に此れによつて制限せられ、否定せられる活動として本來は自我でないものとして考へられる。然るに眞の根基としての具體的な同一は決してかゝる見方を最

後のものとしては許さない。

自我の直觀は確かに知的直觀の一つの著しい形態であり、缺くべからざる契機ではあるが、決してそれの全部ではない。自我が本來はイデアール、レアールであり乍ら、自我としてはイデアール面が根柢とせられる樣に、吾々には丁度此れの對照物としてのレアールなものが考へられる。それはシェリングが自然哲學に於いて捉へんとした所の根源的自然に外ならない。

此の根源的自然は自我と同じく、そして單なる自然(所產としての自然)と異つて全く非客觀的で、從つて純粹なる活動で(能產的自然)、而かもやはりイデアール、レアールの同一である。然し乍ら自我と反對に、自然として、レアール面が中心となり、此の方面から見られるのである。從つて自我の主觀的原理から獨立した客觀的原理であつて、自ら動的過程 dynamischer Prozess を生產する所の活動である。自然哲學にとつては此れが、先驗哲學に於ける自我と同じ樣に無制約者である。

「自然哲學者は先驗哲學者が自我を取り扱ふと同樣に自然を取扱ふ。從つて自然そのものは彼にとつて無制約者である。此の事は然し吾々が自然より客觀的な存在を除外することによつて初めて可能である。客觀的存在は先驗哲學に於いても

自然哲學に於いても決して根源的なものではない。根源的なものはそれ自身は客觀でなく、而かも凡ての客觀的なものの原理である所の最高の構成的活動でなければならぬ。」(III. S. 12)

かくの如き根源的自然の直觀を知的直觀と呼ぶことは無理の樣でもあるが、然しやはりイデアール、レアールの對立の同一の直觀(かゝる對立の同一は感性的に、形象的に直觀出來ない、それ故にこそ非感性的、卽知的直觀である。これは自我の場合も同樣である。)として廣義に知的直觀と呼ぶことが許されるであらう。「私は自然哲學の爲めに、知識學に於いてそれが要求せられた如くに知的直觀を要求する」(IV. S. 87)

かゝる根源的自然はイデアール面を中心として捕へられる自我に對してはレアールであり、自我のイデアールな活動に對して此れを制限し、妨げ、否定する所の暗き根柢である。かゝるレアールな働きがイデアールな働きともつれ合ふ過程をレアールな原理を中心として見たものが自然哲學である。從つて此の根源的自然の知的直觀は自我の直觀に對して、此れの否定的原理の直觀と見ることが出來る。此の根源的自然の構成的過程の直觀が自然哲學の課題に外ならない。

尙ほ、此の自然の知的直觀についてシェリングの有名な言葉を引用するならば自然について哲學するとは自然を創造することである。勿論此の創造は單なる隨意的創造、主觀的構想ではなく無制約的原理としての根源的自然そのものの必然的生產を意味する。自然について哲學することは單に所產としての自然について考察するのではなく、かゝる根源的自然の生產的活動そのものの知的直觀を意味する。即ち此の場合の知的直觀は單に感性的直觀の如く、物をその部分に於いて、特殊として見るのではなく、全體として見ることであり、客觀を「第一根源に於いて洞察すること」であり、「自然をその捕はれてゐる生命なき機械的機構よりめざまし、自由な命を與へ、眞に生きた自然の活動を取り返す」事である。

かゝる知的直觀は單なる有限的存在、或は物の直觀である感性的直觀と異ることは勿論であるが、同じく活動と考へられるも、物に對した主觀的な自我の活動の直觀としての本來の知的直觀とも區別せられねばならぬことは明かである。

然し乍ら此の根源的自然としての活動そのものは果たして如何なるものであらうか。自然哲學としては一個の獨立なる無制約者として絕對的なる活動と考へられねばならぬとしても、先驗哲學に於ける自我の活動と決して別のものではないと

考へられる。具體的なるものとしては一つの無制約者、卽ちイデアール、レアールな活動の絕對的同一としての無制約者があるのみである。自然哲學と先驗哲學とは二つの獨立なる學ではなく、むしろ一つの哲學で唯だその課題の方向が反對になつてゐるにすぎない。具體的なる知的直觀の內容としてはイデエルとレエルとの絕對的同一、卽ち主客觀の外にはない。成程シェリングには次の如き言葉がある。「觀念論をよく理解した人々でも自然哲學を理解しないと云ふことの理由は次の點にあるのである、卽ち彼らにとつては知的直觀の主觀的方面から自らを引き離すことが困難、或は不可能であると云ふ點にあるのである。」(IV. S. 87) 從つて此の場合シェリングによつて要求せられるのは暫らく知的直觀から主觀的なるものを引き離して考へること、換言すれば此の直觀から直觀するものを捨象して考へると云ふことである。(IV. S. 88)

然し此の事は文字通り主客合一の知的直觀より主觀を除外してしまふと云ふことを意味するのではないと思ふ。もしそうならばあとに殘るものは單なる客觀のみとなるであらう。然し自然哲學に於ける知的直觀も知的直觀としては主觀客觀でなければならぬ。前に述べた如く唯だ此の場合に於いてはそれが客觀的な側か

ら、從つてその合一が客觀的なるものとして眺められることになる、と云ふことを意味してゐるのであらう。從つてそれは成程客觀的なるものではあるとしても、單に客觀ではあり得ない、勿論主觀客觀でなければならぬ。

知的直觀には本來主觀的なるもの(或はイデアール)だけではなく、同時に客觀的なるもの(レアール)がなければならぬが、自然哲學に於いては此の中、客觀的なるものが中心とせられて主觀的なるものが此れより說明せられ、先驗哲學に於いては主觀的なるものが中心とせられて客觀的なるものが此れより說明せられるのである。從つて先驗哲學に於ける知的直觀も勿論自然哲學に於けると同樣一面の捨象を反對の側に於いて要求せられると云はねばならぬのである。自我の知的直觀も自然の知的直觀も共に一面の抽象を持つと云はなければならぬ。從つて此處に當然兩者の統一としての具體的な知的直觀が要求せられる筈である。眞の知的直觀は單に自我の直觀でもなく又單に根源的自然の直觀でもない。此れらはむしろ眞の知的直觀の半面であると云はねばならぬ。此の知的直觀をかりに絕對的(知的)直觀と呼ぶならば(此の直觀が普通には、やはり知的直觀と呼ばれるとしても知的と云ふ限定は決してふさはしくないであらう。何となれば成程此の直觀は單に感性的でない

といふ意味はあるとしても、直ちに知的、卽ち論理的、合理的といふことは出來ないからである。）此れこそ眞の絕對的同一を內容とするものであると云ふことが出來るであらう。勿論知的直觀と云はれる以上はその內容は常に主觀と客觀との同一に外ならないが故に、前二つの知的直觀に於いても主客の同一がなければならぬことは明かであるが、此の最後の立場に於いてはかゝる同一が眞に同一に於いて、卽ち主觀的（アール）でもなく、客觀的（レアール）でもなく、云はゞその中和點 Indifferenzpunkt に於いて捕捉せられると云ふべきである。勿論此の中和點といふのも單に兩極端の中點と云ふが如き對象的な意味に解すべきでなく後に云ふ分立の同一の意味でなければならぬ。シェリングの云ふ所に從へば（「我が體系の敍述」）此の立場は今迄にも勿論示向 orientieren されてゐた所のものである、然し今迄は此れを二つの反對の極（自我、自然）から從つて反對の方向から眺められたのであるが、今始めてその反對なる極が、その上に安住すべき地盤が與へられたのである。絕對的直觀によつて始めて自我にも自然にも同時に、自らを在らしめる所の根基が與へられたのである。

然し乍らシェリングの此の絕對的直觀（前期の絕對的同一論の體系に於ける）に於いて捉へられた所のものは云はば全くの靜としての全一、或は永遠である樣に見え

る。彼は此の立場に於いて絶對的な知的直觀の代りに絶對的理性なる言葉を用ひてゐるが、眞に自體(アンジツト)に於いて存在するものは絶對的理性に於いて存在するのであり、此の外に於いては眞に存在するものはない。絶對的理性に於いてあるものは全く一であり、多、變化、差別等は絶對的理性以外に於いて例へば反省、構想力などに對して現はれるのである。從つて勿論眞の存在としての個物、個物的存在なるものはなく(此れらは唯だ時間的世界に於いて、從つて又反省(レフレクシオン)の世界に於いてある)眞の自體の世界は時間を離れた世界であり、此の意味に於ける永遠の世界である。此の場合辨證法は唯だ時間的な對立、差別、變化の世界に關はり、反省の立場に於いて成立つと考へられる。辨證法の世界は眞の世界ではなく、假りの世界であり、更に誤りの世界である。自體の世界は絶對的同一の直觀、卽理性の世界である。

然し乍ら自我及び自然の眞の根基としての絶對的同一は果たしてかゝるものとして理解されるであらうか。眞に具體的な知的直觀としての絶對的直觀とは果たしてかゝるものとして考ふべきであらうか。

否、既に同一の種々相を略述した所に於いても示されてゐた樣に、最後の立場としての絶對的同一は決してかゝる抽象的なものに止まるべきではない。絶對的直觀

は絶對者の直觀、眞の永遠の直觀と云ふことが出來るが、此の場合の永遠或は絶對者は、シェリングの初めに考へた如き時間を、或は差別を全く絶したる自體、變化或は生成を全く離れたる同一と解すべきではない。もしかくの如くであるならば此の絶對或は永遠と、相對或は時間、同一的なるものと辨證法的なるものとは全く抽象的に對置せられ、而かも此の對立は何ら具體的な根基によつて統一されることなしに唯だ一方が眞として肯定され、他方が僞として否定されるのみであらう。云はば辨證法的なるものと同一的なるものとが唯だ反省的、悟性的に區別、對置されるにすぎないことになる。此れはシェリング自身の求めた所の具體的な「構成的」な立場にも遠ざかるものと云はなければならぬ。

眞に「構成的なる」立場卽ち主觀と客觀、一般と特殊、述語的なるものと主語的なるものとの眞の同一としての知的直觀の立場の本質をなすものは、單なる無差別、同一と云ふ點ではなく、むしろ對立の同一、矛盾の同一といふことになければならぬ。主觀と客觀、一般と特殊等は決して論理的に(例へば類概念等によつて)統一されることの出來ない所の全く對立、矛盾する所のものである。而かも此の矛盾が一であると云ふ所に具體的な立場が開けるのである。一般と特殊との關係についても、一般と特

殊を全く孤立的に存在すると考へ、かゝる一般が特殊を自己より產出すると考へ、又反對に特殊より一般を產出しうる如くに考へるのは抽象にすぎない。在るものは凡て皆、一般卽特殊である、此れを一般の特殊化、特殊の一般化と名づけてもよいであらう、唯だ特殊を離れた一般が自らの中より、その自己限定によつて特殊を產出するのが特殊化の意味であつてはならぬ。一般者の自己限定とは一般卽特殊の知的直觀、場所、或は地盤と於いてあるものとの同一の知的直觀であり、換言すれば特殊が卽ち於いてあるものが、自己をあらしめる所の眞の地盤を自覺するといふことに外ならない。

かくの如き絕對的直觀に於ける永遠、或は絕對的同一は普通に考へられる樣に決して、單なる無差別的世界、凡ての牛が一樣に黑くなる夜の世界としては考へる事は出來ない。成程或る意味に於いては、それに於いては凡ての對立は否定せられ、イデアール卽レアールとなるとも考へられるが、然し此の事は對立が全然卽ち如何なる意味に於いてもない事を意味しない。唯だ對立が所謂對立として存しないと云ふにすぎないと思ふ。對立は否定を豫想する。絕對的同一に對立がないと云ふことは絕對的同一に否定の原理を拒むと云ふことであらう。絕對的同一は然し果たし

て全然否定的原理を拒むものであらうか。單なる肯定的な一、無差別にすぎないものであらうか。

絶對的同一は勿論單なる否定に終るものではないが、否定の原理を自己の中に有するものでなければならぬ。從つて何らかの意味に於いて對立を自己の中に有すると云はねばならぬ。否定するものは否定されるものとは全く違つた卽ち自己に非ざるものでなければならぬ。此の云はゞ自己と自己に非ざるものとを含むが故に、そしてそれらの同一であるが故に絶對的同一であるのである。此の意味に於いて、かの神に於ける神に非ざる根柢としての「神に於ける自然」「人間的自由の本質について」(參照)の如き否定原理を含む同一こそ眞の絶對的同一と云はれうる。

自我の同一、根源的自然の同一も勿論、絶對的同一の一面と考へられる以上、かゝる否定原理が働いてゐると云はねばならぬ。自我は自我を生產する、自我の此の自己生產(自己客觀化)以外に自我の働きはない。此の事は言ひ換れば自我が自己を否定することである。自我が自己を否定し、制限することによつて自我は自己を有限化し、客觀化する。然し此の過程は嚴密に云へば決して單なる自我の、或は自我と呼ばれる所の働きのみでは可能ではない。自我を否定するものは自我ならぬものでな

ければならぬ。自我の中にはどうしても自我ならぬものが働らく。此れは自我に對して自然と呼ばれるより外はないが、勿論普通の具體的な自然などではない。卽ち自我には自我の存在の根柢として自我ならぬ、云はゞ自然としての原理を認めねばならぬ。かゝるものが自我を否定し、從つて自我の全自覺的過程を可能ならしめるのである。然し乍ら普通の自我直觀としての知的直觀に於いては尙ほかゝる云はゞ自我に於ける自然としての否定原理の直觀が不充分であり、自我の眞の根基が尙ほ明かでないと云はねばならぬ。此の否定原理としての自然そのものが直ちに眞の根基ではないにしても、此の否定原理を明かに取り出すことによつて始めて眞の根基が明かにせられうるのである。

自然哲學に於ける根源的自然の直觀は確かに此の自我直觀に於ける弱點としての、それの否定的原理へ迫り行くものではあるが、然しこゝでは此れは又自我から引き離されたものとなつてゐる。獨立的な一學科としての自然哲學の根本原理としての意味が强いのである。從つて此の自然に對しては又此れを否定するものが要求せられる。自然に對するものは普通自我と考へられる、卽ち自然に於ける自然ならざるものとしての自我が此の自然の否定原理となる。(此の自我も勿論單なる具

體的自我を意味するのではない）

自我に於いては自我に於ける自然が、卽ちそれのレアールな根柢が、自然に於いては自然に於ける自我が、卽ちそれのイデアールな根柢が否定原理を表はすのである。此の意味に於いて自然は自我を、自我は自然を否定する、根源的な自我と根源的な自然とは相互に對立し否定する。

然し乍ら此の事は更に一層深く考へる必要がある。自然が自我を否定するのは、成程、單にレアールな原理がイデアールな原理と對立し、此れを否定する樣に見えるが、然し實はそうでなく、眞に否定するものは自我に對するが如き自然ではなくして、むしろ自我をも自然をも包み、それらを在らしめる所のそれらの絕對的根基の働きである。絕對的無としての絕對的同一が眞に否定するのである。低い立場に對しては高い立場は常にそれの否定原理として現はれる。否定する點から云へば此れは單にそれに對立するものとしてのみ考へられるかも知れぬが、實はそうではなく、更に具體的な深いものが否定するのである。

イデアールとレアールとはあくまでも根源的對立である。根源的對立であるが故にそれら各〻が全體であり、又絕對である意味を有たねばならぬ。而かも又一方か

ら云へばイデアールがなければレアールもなく、レアールがなければイデアールもない、イデアールがあるが故にレアールがあり、レアールがあるが故にイデアールがあると云ふ風に兩者は互に他を要するのである。從つて決して一方が他方になつてしまふことは出來ぬ。而かも此の對立があるにはその根基として此の對立を對立として在らしめる所のもの、從つてイデアールをイデアールとしてレアールをレアールとして在らしめる所の同一的なるものがなければならぬ。此のものは此れらを在らしめるものであるが故に、又此れらを否定する所のものである。卽ち此れは全面的にイデアールであると共に又全面的にレアールである所のもの、イデアールをイデアールとして全面的に生かすと共に、レアールをレアールとして全面的に生かす所のものである。レアールがイデアールと對立し、イデアールを否定する如くに見える場合も實は單にレアールがイデアールを否定するのではなく、それらを在らしめる根基としてのかゝる同一者が否定するのである。在らしめる所のものは又否定する所のものである。

此處に於いて吾々は否定に二種を或は二義を考へることが出來る。一つは消極的な、或は抽象的な意味の否定であつて、此れは唯だ對立するものが對立の相手を否

定する場合であつて、此れに於いては否定するものは單に自己の外に考へられる、對他的、向外的、他律的否定である。他は積極的な、具體的な意味の否定であつて、此れは對立するものでなくして、對立するものをも自己をも包むもの、云はゞ絶對無としての同一的地盤そのものから出づる否定、從つて自己をも在らしむる力そのものであり、その意味に於いて此れは內から出づる所の、否むしろ自他の底が破れることによつて働く所の否定である。前者は否定を單に表面的、外面的に眺めたものであつて否定の眞の意義は勿論後者になければならぬ。眞の否定原理は對立者ではなくして、むしろその根基としての絶對的同一者である。單にイデアールと對立せるレアールなる原理としての否定原理(Natur in Gott)、純粹なる否定、純粹なる無は尙ほ抽象的な否定であると云はねばならぬ。

勿論かくの如き積極的否定は消極的な否定なくして直接に現はれると云ふのではない。積極的否定は常に消極的否定を通して、從つて普通の言葉を用ふれば否定の否定としてのみ現はれうるのである。

扨てかゝる絶對的同一は決して構成し、生產される事の出來るものではない。構成或は生產の働きそのものがかゝる同一を根基としなければならぬからである。

然らば自我或は根源的自然の働きが自己客觀化、卽ち主客觀化であり、客觀の生産或は構成であると云はれるのは如何なる意味であらうか。

此の事は勿論、主觀或はイデアールなもののみ先づあつてこれより客觀、或はレアールなものが産出されると云ふことではない。これは觀念論的な考方であるが、然し眞に在るものはイデアールでもレアールでもなく、唯だ兩者の絶對的同一である。此の點から云つて此の正反對の考方も同樣に誤であると云はねばならぬ。

或は自我もしくは自然を綜合的普遍と見、單にそれの自己限定によつて全く必然的に特殊が産出されるとする、汎神論的もしくは發出論的考方も吾々のものではない。更に自我そのものを客觀的存在(有)と考へ、かゝるものからの實在的關係による生産(因果的或は目的論的)を考へたり、或は全然の無よりの神祕的創造の如きものを考へたりする如きは今の場合問題にする迄もないと思ふ。

此の場合、主客觀化或は構成、生産等と云はれるのは嚴密には再構成、再生産でなければならぬと思ふ。自己を在らしめて居る所の眞の根基を絶えず見出し、否むしろ想起し、此の意味に於いて自己を自覺し行く過程である。客觀化するといふ事は一面から云へば更に深く主觀化するといふことである。一層深い自己に還り行くこ

とである。構成すると云ふことは、一層深く根基を掘り下げ、それを自覺するといふことであり、自らを在らしめるのみならず、自らを在らしめた所のもの(眞のイデアとしての絕對的同一)を想起するといふことである。

勿論かくの如き想起としての知的直觀は、自我或は根源的自然の直觀として、絕對的根基としての絕對的同一の働きそのものとしての知的直觀とは區別しなければならぬ。自我或は根源的自然の知的直觀は絕對的直觀の契機として、それの一面として、それを根基にしつゝ、構成され、生產(想起)されるのであるが、絕對的根基としての絕對的同一そのものは決して構成されることも、生產されることも、況んや再構成されることも出來るものではない。何となればそれは此れらの凡ての働き、もしくは直觀の根據であるからである。生產されたもの、再構成されたものは既に絕對的同一ではなく、それの影にすぎない。絕對的直觀は構成或は再構成されたものにあるのではなく、むしろ構成する或は想起する自我そのもの或は根源的自然そのものの働きを通して、否むしろそれらの否定的原理を通して把握されうるであらう。

扨て絕對的同一に於いては以上の如く對立を認めなければならぬ。然しそれが絕對的同一である限りは對立は對立として存しないと云はなければならぬ。然し

此の事は一體如何にして考へられるであらうか。

それは對立を綜合する立場から對立を見るといふ事より外ないであらう。對立が對立として存しないと云ふ事は對立を眞に對立として在らしめる所の立場から、換言すれば對立を眞に包む所の根基から對立を見ると云ふことである。對立は此れを對立するものから、卽ちそれらが立つ所の地盤もしくは根基の自覺なくして見ることも出來るであらう。例へばAとBとの對立があるとすればAをBより、又はBをAより見ることも出來るであらう。(そして通常はかゝる見地より見られたる對立を對立と考へてゐる。——前述の消極的否定參照)然しかゝる立場よりは決してAとBとの眞の對立從つて又眞の同一は見られないであらう。AとBとの眞の對立は却つてAとBとを在らしめる所の兩者の根基Cに於いて見られることが出來るのである。對立を眞に綜合する所のその根基に於いて對立が眞に對立として露はにされるのであるが、(後に明かにされる用語を豫め用ふるならば、所謂對立が對立である事をやめて、それが更に分立として深められるのである)此れと同時に又此の同一的根基よりそれら對立者を見ることに於いて、それらは所謂對立としては存しないと云ふことになるのである。眞の對立は單に同時にそこにある所の二つのも

のの對立と云ふが如きノエマ的な對立ではなくして、かゝる對立を止揚することに於いて初めて現はれる所のものである。從つて所謂對立としては存せずとも否定原理は更に此の奥に云はゞノエシス的側に於いて働いて一層深き對立を立てるのである。對立が對立として無くなることによつて却つて一層深き對立が從つて又同一が見られるのである。卽ち眞の絕對的同一に於いて所謂對立はないと云ふことが確かであると同樣に、此の同一は又所謂單なる同一(對象的な對立に於ける同一)ではなくして、眞の否定による深き對立によつて裏付けられたる、云はゞノエシス的なる同一であると云ふことも確かでなければならぬ。絕對的同一が、もし單に對立が全く消え失せて何物も無い如きものを意味するならば、かゝる同一からして對立が、又發展や變化が如何にして現ずるかの說明は全く不可能となるであらう。然し絕對的同一は決してかゝるものではない。それはむしろ絕對無或は絕對否定の原理として一面より見れば絕對的な對立(分立)そのものであると共に、他面より見るならば此れは絕對肯定として同一そのものでなければならぬ。從つて此の意味に於ける眞の對立と同一とは別々のものではなくして、むしろ絕對的同一そのものの二面或は二契機と考へねばならぬ。絕對者卽ち絕對的同一はあくまでもシェリング

の表はした如くイデアール面とレアール面との同一でなければならぬ。

四

以上述べた如く、知的直觀及びその內容たる絕對的同一が種々に考へられ、シェリング自身に於いてもその意味が一定でなく、勿論大體に於いては正當なる方向に向つて漸次具體化せられ、深化せられてゐると見られるのであるが、そしてそのことは前述の如く知的直觀が單なる同一の直觀としてゞなしに、その反面たる辨證法的對立をも包むものとして深化せられることでなければならぬと云はれるのであるが、最後にかゝる知的直觀と所謂辨證法との關係を少しく反省して此の小論を終りたいと思ふ。

辨證法そのものの詳細なる研究には此處では觸れることは出來ないが、辨證法が普通に、單なる一、同一に對して、對立、矛盾を肯定する所の方法として見られてゐる點から云へば、同一を强調する所の知的直觀は對立を肯定する所の辨證法の云はゞ對蹠、正反對でなければならぬ。知的直觀は主客の同一を、辨證法は對立の止揚を、從つて前者は寂靜の世界を、後者は發展、もしくは運動の世界を示す。のみならず知的直

觀は直觀として、直接的融一、もしくは神祕的合一に傾くに對し、辨證法は間接的、媒介的結合、概念的、反省的理解を重視する。

かくの如く考へるならば、知的直觀と辨證法とは全く相反した、無關係のものと考へられるかも知れないが、然し實は必ずしもそうではない。兩者の本質そのものより見てもそうであると云ひ得るが、シェリング自身の思想を考察することによつても此の事は明かにせられる。そして此の點についても一部は既に前節に論じたのであるが、此の關係に關する限りそれをもう一度思ひ起して見なければならぬ。

彼の先驗哲學及び自然哲學に於いては、前者では自我もしくは叡知、後者では自然の自己客觀化が原理であつた。自我も自然も所謂客觀ではない。共に無制約者として、それ自身客觀ではなく、自ら客觀となる所の、卽ち自己客觀化する所の原理であつた。此の爲めには自我も自然も共に、單なる主觀、もしくはイデアールなものであることは出來ない、主觀客觀、イデアール、レアールでなければならぬ。一方は無限に進むレアールな、客觀的な制限されうる活動、他方は此の無限性に於いて自らを直觀せんとするイデアールな、主觀的な制限されえざる活動である。此の二つの活動の對抗、緊張により、自我は(自然も同樣)自己を構成(生產)し、構成すると共に此れを直觀す

るのである。自我に於ける構成は單なる構成ではなく、構成であると共に又此の直觀である點に特徴を有する。

換言すれば自我の本質は自ら客觀となると云ふ事、見られる所の自我が直ちに見る所の自我であるといふ事にあるが、此の自我が自らに對して客觀となる爲めには、卽ち無限なる生産作用に限界を與へる爲めには自我は自分自身に對して何物かを對立ささなければならぬ。自我は自らに何物かを對立さすことによつて初めて自己を見ることが出來るのである。然し此の事が可能なる爲めには自我そのものの本質に於いてレアール、イデアールなる矛盾的活動が考へられねばならぬ。眞の自我(自覺)は此の根源的綜合である。

扨て自覺の絶對的作用に於いては凡ての契機が同時にあるが、哲學は此れを繼起的に明かにする。それで正、反、合と云ふ進行をとる。從つて綜合は産出されたるものとなる。然し此の産出された、從つて客觀化された綜合と、眞の兩者の具體的地盤としての同一とは區別されねばならぬ。産出或は構成の背後には必ずその對立を包むところの同一的地盤がなければならぬ。此れこそ眞に全體を動かす所の前進的なるものである。構成は實はかゝる根基の想起であり、從つて再構成である。

扨て此の二極性によつて一方に於いては自覺の歷史としての先驗哲學の體系が、他方に於いては自然の歷史(根源的自然の動的過程)としての自然哲學の體系が可能となるのである。此處に吾々は初期のシェリングに於ける辨證法を見ることが出來る。そして此れはレアール、イデアールの對立、緊張、兩者よりの中項の生產によるそれらの合一なる形式によつて表はすことが出來る。

かくの如き哲學的構成の辨證法的構造にも拘らず、シェリングが特に知的直觀を强調したのは、對立よりも同一を重視する彼の思想の當然の成り行きであらう。然し乍ら眞の辨證法は勿論單なる對立や矛盾のみで成立つことが出來ないと同樣に、眞の知的直觀も單なる同一のみの直觀であることは出來ないであらう。眞に具體的なるものは「對立の同一」でなければならぬ。從つて辨證法も知的直觀を缺くことが出來ないし、又知的直觀も辨證法を缺くことは出來ない。先驗哲學に於ける先驗的過程や、自然哲學に於ける動的過程の各段階に於ける辨證法と知的直觀との結びつきが既に此の事を示してゐると云ふべきである。

然し若し此の差別(對立)と同一とが抽象的に固定せられて、差別に對して特に同一が取り上げられるならば、同一の直觀としての知的直觀のみが物の眞の姿を捉へる

ものとせられざるを得ない。シェリングの同一論期の體系は、成程一面より見れば彼の先驗哲學、自然哲學に於いて豫想せられたる同一的根基の明確なる自覺と見ることが出來、從つてその意味に於いては前期哲學の歸着點でもあり、深化としても考へられねばならぬことは明かであるが、然し此の立場は尙ほ一つの抽象的固定を免れることは出來ない。同一を取り上げる反面に於いて差別、對立を全然棄て去らねばならなかつた。知的直觀と辨證法とは抽象固定的に引き離されねばならなかつた。

理性(知的直觀)の中にある眞の存在はアンジッヒザインであり、此れは永遠の世界、卽ち超時間的な世界であり、一なる世界である。生成する、變化する世界、要するに對立の世界(辨證法の世界)は理性に對して單に悟性と構想力の世界であり、反省に於いて表はれる所の假相界である。

かくの如く解せられたる知的直觀も辨證法も元より抽象的一面にすぎないと云はねばならぬ。知的直觀も深く掘り下げるならば決して單に神祕的直觀、直接的合一、否定を離れた直接なる肯定、時間或は生成を全く離脫した永遠といふが如きものではなく、辨證法も亦單なる分析、對立、或は單なる生成、過程に終るべきではなく、對立

の同一、生成そのものの根基の直觀を含まなければならぬと信ずる。換言すれば相對としての生成の一一の瞬時に於けるその働き(辨證法的構成)そのものの直觀、從つて永遠としての絕對的根基の直觀的把握なしには可能ではないであらう。

然し此の知的直觀と辨證法とが結び付くべき「對立の同一」と云ふことは果たして如何に解すべきであらうか。前に知的直觀或は絕對的同一に於いては對立はないのではない、唯だ所謂對立としてはないのである、而して對立としてないと云ふことは對立が更に一層深い立場から、卽ちそれら對立を包むところの場所或は地盤から眺められることによつて可能である、と述べたが、すればかゝる立場から見られるならば對立は果たして全然消え去るのであらうか。

此れについて、吾々はさきには唯だ無造作に考へた對立といふ事を更に深く考へて見ねばならぬと思ふ。

對立とは普通には例へば赤と白(非赤)とか運動と反動とか云ふ樣に、對立するものが客觀的にそこにあるものとして考へられる。主觀、客觀イデアール、レアールの對立と云つても結局はかくの如くに考へられる。換言すれば對立が對象的にノエマ的に見られるのである。從つて矛盾或は對立の合一としての辨證法も此の見方に

於いては對立するものが兩立しつゝ、對象的に存在し、而かも相互に否定し合つて、それらを統一する所の立場に於いて止揚せられると見られる。換言すれば正、反、合といふ此の過程そのものが對象的に捉へられてゐるのである。

然し乍ら對立は唯だノエマ的にあるのみではなく、ノエシス的にもあると云ひうるのである。對象的にある所の對立がそれらを包む所の立場から見られることによつて、成程それらは所謂對立としては、卽ち對象的な對立としては止揚されるであらう。然し此の事によつて對立そのものが全然なくなるのではなく、對立は又別の方面に、卽ち更に高き次序に於いてあることが明かになる。卽ち對象的な方面にではなくして、働きの方面、根基への關係の方面に於いて、換言すればノエシス的方面に於いて對立は見られるのである。かゝる對立を吾々はノエマ的な意味のそれと區別して、シェリングの言葉を借用して(VII. S. 407)分立 Disjunktion と名づけることが出來る。

分立とは對立せるものが決して同時にあるのではない、對立せるものが云はば分れて全場所を占めるのである、あるものは常に一であり、全體である、それが一方である時は他方ではない。レアール、イデアールの分立について云へば、此れらは決して

兩方同時にあると云ふのではなく、その根基としての絶對的な同一(シェリングは此れを分立の後に現はれる絶對的同一と區別して絶對的無差別 absolute Indifferenz として表はしてゐる)がイデアールとして働く時には全面的にイデアールとしてあり、レアールとして働く時には同じく全面的にレアールとしてある、イデアールとしても全體であり、レアールとしても全體である。ノエマ的には從つて所謂對立は消えて全體にして一である、唯だ根基卽ちノエシスの側に於いて「此れかあれか」なる分立がある。ノエマ的には對立が全くなくなるとしても、或は對立としてはないとしても、ノエシス的にはかくの如き分立があるのである。ノエマ的に一と見られる根基は同時にノエシス的に分立を含みうる。而かも此のノエシス的なる分立は直ちにノエシス的なる同一でなければならぬ。かくの如き深き對立卽ち分立があるが故に、所謂對立卽ち對象的對立も可能となるのであらう。

從つて對立或は二元性 Dualität といふことも二樣に考へることが出來る。卽ち普通の對象的な、同時的な或はノエマ的な對立としての二元性と、かくの如きノエシス的な分立としての二元性とである。

從つて又辨證法も單にノエマ的な、對象的な對立によつて成立つ所のものと、ノエ

シス的な分立によつて成立つ所の辨證法が考へられねばならぬ。而してかくの如きノエシス的な辨證法こそむしろ眞の辨證法と云ふことが出來ると思ふ。此れは前の辨證法の如く、對象的な意味に於ける過程としての進行、もしくは運動ではない。かゝる意味での過程をむしろ包む所の、從つてある意味に於いては過程を斷絶する所のものである。勿論單に對象的に考へられても正、反、合の進行の中には斷絶の連續、偶然の必然といふ意味も出て來るであらうが、此れはその根據を具體的な辨證法としての「分立」の斷絶卽連續或は非連續の連續の中に持たなければならぬと思ふ。此の意味に於いてノエマ的な辨證法は常にその根をノエシス的な、分立としての辨證法の中に持つと云ふことが出來る。

扨てかくの如き分立によつて成立つ所の眞の辨證法の根源的な働き――此れは絶對的同一としての根基そのものの全面的な働き、從つて又かの具體的な、積極的な否定の働き――の直觀こそ眞の知的直觀にして、かくの如き知的直觀は實は眞の辨證法の缺くべからざる半面であると思ふ。

シェリングはかゝる分立的な辨證法の最初と最後とを區別し、最初はレアール、イデアールの絶對的無差別(勿論分立としての二元性は認める)と考へ、分離が現實にな

り、愛によつて此れが合一されたる現實的、具體的狀態、卽ち對立が同時zugleichとなれる狀態を絕對的同一と名づけ樣としてゐるが、(VII. S. 407, 408) 此の最後の具體的な狀態と雖も勿論決して普通の對象的な狀態として考へられるべきではないであらう。卽ち此の同時といふ意味も兩對立者がノエマ的に對立し愛――對象的に考へられたる結合力としての――が此れを合一すると云ふ意味ではないであらう。

眞の愛とはむしろかゝる絕對的同一の働きそのものである。此れは、各〻それだけで獨立であり、全體でありうるが、而かも實際はそうでなく他なくしてはあり得ない所のものを結びつける所の働きである。あるものが全體でなく、單にそれの部分だけならば愛はなく、又全然獨立で他のものを要せぬならば愛はない。イデアール、レアールはそれ自身各〻それだけで全體であり、獨立である、而かも各〻は他なくしてはない、かゝるものを結びつける所のものは此れの分立の根基としての絕對的同一そのものに外ならない。我と汝との眞の關係もかゝるイデアール、レアールの分立的關係と解することが出來る。かくの如き云はばノエシス的なる愛によつて眞の對立(分立)が結びつけられると見るべきである。眞の辨證法も、從つて又眞の知的直觀もかゝる愛――絕對的同一に於いて成立つと云ふべきである。(終)

昭和九年九月八日